

日にずれ込んだが、夏期として扱った。

それぞれの痕跡について、一様に分布していると仮定して各痕跡毎に期待値を求め、それと実数値の偏りを χ^2 検定とBonferroni検定により検討した。有意水準は5%とした。

2-4 結果

1) ラジオテレメトリー法によるイノシシの活動点の環境区分別分布

ラジオテレメトリー法によって得られたイノシシ4頭の活動点は、主にコナラ、アベマキから成る広葉樹林で有意に多かった(表3, Bonferroni検定, $p < 0.05$). 一方, 3頭の活動点が主にスギ, ヒノキ, アカマツの壮齢の針葉樹林で有意に少なかった(Bonferroni検定, $p < 0.05$). 2頭の活動点はその他の環境で有意に少なかった(Bonferroni検定, $p < 0.05$). その他にまとめた環境区分のうち, 竹林, 水田放棄地, 牧場, 自然裸地で活動点が得られたが, 水田, 畑地, 畑放棄地, 果樹園, 宅地では得られなかった.

2) イノシシの痕跡の環境区分別分布

掘り起こし数の環境区分別分布の偏りは, 全ての調査時期に認められた(表4). 水田放棄地では全ての季節区分で, 竹林では秋期を除く季節区分で掘り起こし数が有意に多かった(Bonferroni検定, $p < 0.05$). これらの水田放棄地は, ススキ草原かその他のイネ科植物が繁茂する湿地になっていた. 竹林の構成種は, マダケ(*Phyllostachys bambusoides*), ハチク(*P. nigra*), モウソウチク(*P. pubescens*)の3種であった. 掘り起こし数が有意に少なかった環境区分と季節は, 針葉樹林の全ての季節, 秋期を除く広葉樹林, 夏期, 冬期の水田であった.

表3. 島根県浜田市及び金城町における1994年10月～1997年8月のラジオテレメトリー調査で得られたイノシシの環境区分別活動点数の偏りと各環境区分の面積.
期待値が5未満及び活動点が得られなかった環境区分は、「その他」としてまとめた.

個体	広葉樹林 (2,209ha)			針葉樹林 (1,761ha)			その他 (1,642ha)			計(5,612ha)
	F ^a	E	b-test ^b	F	E	b-test	F	E	b-test	
A	73	47.7	+	10	38.0	-	38	35.5		121
B	31	16.5	+	5	13.2	-	6	12.3	-	42
C	38	22.9	+	9	18.2	-	11	17.0		58
D	66	44.9	+	41	35.8		7	33.4	-	114

a Fは実測値, Eは期待値を示す.

b Bonferroni検定($p < 0.05$)により選択的に利用された環境(+)と忌避された環境(-).

表4. 島根県浜田市及び金城町における1996年8月～1999年2月の痕跡調査での環境区分別イノシシ痕跡数.
「泥浴び跡」については痕跡数が少なかったため、検定を実施できたのは夏期のみであった.

a. 掘り起こし

季節	広葉樹林			針葉樹林			竹林			水田			水田放棄地		
	F ^a	E	b-test ^b	F	E	b-test	F	E	b-test	F	E	b-test	F	E	b-test
晩春期	17	70.1	-	33	90.7	-	287	67.7	+	0	144.9		120	83.6	+
夏期	32	81.3	-	61	126.0	-	453	119.3	+	21	289.7	-	184	134.8	+
秋期	10	14.9		7	28.5	-	54	19.1		0	47.9		64	24.6	+
冬期	35	77.7	-	30	98.5	-	315	88.8	+	33	190.0	-	132	90.0	+

b. 泥浴び跡

季節	広葉樹林			針葉樹林			竹林			水田			水田放棄地		
	F	E	b-test	F	E	b-test	F	E	b-test	F	E	b-test	F	E	b-test
晩春期	0	0.8		0	1.0		0	0.7		0	1.6		5	0.9	
夏期	0	6.9		1	10.7	-	0	10.2		4	24.7	-	59	11.5	+
秋期	0	0.6		0	1.1		0	0.7		0	1.8		5	0.9	
冬期	0	2.0		2	2.5		0	2.3		0	4.9		12	2.3	

a Fは実測値, Eは期待値を示す. なお, 期待値は季節毎の各痕跡数の合計と各環境区分の面積(表2)の割合より算出した.

b Bonferroni検定(p<0.05)により選択的に利用された環境(+)と忌避された環境(-).

泥浴び跡は夏期以外では確認数が少なかったため検定できなかった。泥浴び跡は夏期に水田放棄地で有意に多く、針葉樹林及び水田では有意に少なかった(Bonferroni検定, $p < 0.05$)。

2-5 考察

狩猟やその他の人間活動が活発な地域のイノシシは夜行性を示す(Kurz & Marchinton, 1972; Singer et al., 1981). 本調査地域では, 集落が山間地まで広く分布し, 猟期を除き常に有害鳥獣駆除が行われていること(島根県, 私信), イノシシに対する捕獲圧が高いこと(神崎・大東-伊藤, 1997)から, テレメトリー調査によって得られた昼間の活動点は主にイノシシの休息・避難場所を示していると考えられる. 活動点が集中した調査地域の広葉樹林のほとんどは, 1950年代後半以降薪炭施業が行われなくなった落葉広葉樹林で, 手入れ放棄に伴って草本, 灌木などの下層植生が繁茂したため, 格好の休息・避難場所をイノシシに提供したのであろう. イノシシが密集した低木等の藪を休息場として利用すること(Dardaillon, 1986)は他地域でも報告されている. また, 本種は春, 夏に草本の新芽, 新葉を採食する(Barrett, 1978; Baber & Coblenz, 1987)が, これらは30~40年を経て林冠が疎開し始めた落葉広葉樹林に豊富に存在している(丸山, 1993). また秋には堅果を供給することができる. そのため, 当地域の広葉樹林の大半はイノシシに対して休息・避難の場だけではなく, 食物も豊富に供給している可能性がある.

イノシシの主要な食物はクズ, ススキ, ササ類, その他のイネ科植物の根茎やミミズ, 両生類などの地中動物である(Henry & Conley, 1972; Wood &